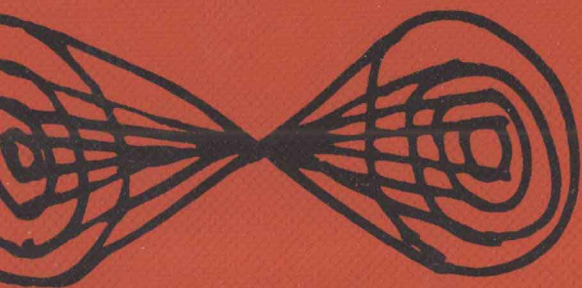


文学と人間像

世界文学大系

別巻
2



文学と人間像

B. フリーストリ

阿部知二・小野協一・大橋健三郎
野崎 孝・皆河宗一 共訳

世界文学大系

筑摩書房版

世界文学大系 別巻 2

文学と人間像

昭和 37 年 6 月 15 日発行

定価 500 円

訳者代表 阿 部 知 二

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2 の 8
振替東京 165768 電話 (291) 局 7651

目次

前書き

阿部知二

5

序

7

第一部 黄金の球体

第一章 活字

10

第二章 イタリアの風景とマキャヴェルリ

15

第三章 フランス——ラブレールとモンテーニュ

22

第四章 イギリスとシェイクスピア

29

第五章 スペインとセルバンテス

44

第二部 「整然たる庭園」

第六章 「かくてすべて光なりき」

52

第七章 演劇

60

第八章 小説

77

第九章 啓蒙運動

91

第三部 月かげ

第十章 ルソーとロマン主義時代

103

第十一章 ドイツとゲーテ

111

第十二章 イギリスのロマン主義者

第十三章 フランスのロマン主義運動

第十四章 ロシア人その他

第四部 破れた印刷用紙

第十五章 時代とその予言者たち

第十六章 詩人たち

第十七章 小説家たち

第十八章 劇作家たち

第五部 現代人

第十九章 書物の背景

第二十章 主として第一次大戦以前

第二十一章 短い間奏曲

第二十二章 戦争の谷間

結語

略伝

解説

阿部知二

432 404 399 339 334 302 270 248 198 183 165 154 142 125

装幀 庫田 焜

文学と人間像

——ルネッサンスから現代まで——

LITERATURE AND WESTERN MAN

by

J. B. PRIESTLEY

Copyrighted in England by J. B. Priestley, 1960.

Japanese translation rights arranged through

Charles E. Tuttle Co., Tokyo.

前書き

これは一九六〇年出版の *Literature and Western Man* の訳である。この重大な論述が、どのような信条と抱負とによって、またどのような準備をもつてなされたかについては、著者による序、さらに本文の内容そのものが十分に語るであろう。訳者たちは、この翻訳がゆるされたことに感謝し、また重い責任を感じるものである。

それにつけて、この訳書の題名が原本のそれに忠実でないことについて釈明をこころみなければならぬ。まず *Western* を抜かしたことである。ここでは、それはきわめて広く、西ヨーロッパだけでなく、ロシア、アメリカ（南北）をも含めた地域を表示するものとして用いられている。（本文中ではこれを「西方」と訳した。「西洋」という語感に何かなじめなかったからである。）つぎに *Man* であるが、これが単数になっているところを見ても、西方の人々というよりはむしろ、人間または人間像という意味を強く持つものと考えたい。つまり原題は、文学と西方の人間（像）との関係、または、文学にあらわれた西方の人間（像）ということを行っているであろう。ところで、それをそのまま「文学と西方人間」または「文学と西方の人間像」などとしたのでは、日本の読者にすぐにはよく呑みこ

めず、あるいはかえって戸まどいを感じさせることになるのではないかと危ぶんで、「文学と人間像」としたのである。なお、それが抽象的または平面的ではなく歴史的に論じられるということをしめすために、「ルネッサンスから現代まで」という旁題を入れることにした。そうすればまた、ほぼこれが西方のことだということも推察できようかと思つたのである。以上のような題名改変の件について、著者および読者の了承が得られることを念願する。

われわれが、その西方の人間でないことは明白である。そのちがう場におかれてはわれわれが、この本に書かれていることをどのように受けとめるかということについては、読者がそれぞれの見解に達しられるにちがいない。ただ、訳者としての一応の任務であろうと感じて、訳者中の阿部が——蛇足と思いつながら——巻末に、「解説」の名で少しばかりの感想を書いた。

分担は、序、第一部、第二部は小野、第三部、略伝は皆河、第四部は大橋、第五部は、はじめの三章は野崎、——野崎病気のため残りの一章および結語は皆河であり、全体の文体統一は阿部であった。訳についてのすべての責めは阿部が負うべきものである。（一九六一、四、二九）

序

標題の「西方」の語は、われわれが鉄のカーテンの外側にあることとはなんら関係がない。それは古来の地理的・文化的意味でもちいられているのであって、アメリカはもちろん、ロシアも含まれ、アジアは全部のぞかれる。標題としてあまりかさばりさえしなければ、「西方人」を「近世」という語で限定したいところである。なぜなら、われわれのこの物語は、今日知られているような書物を可能にした印刷のための活字が発明された、少なくとも、ヨーロッパではじめて用いられるようになった、十五世紀後半にはじまるからである。したがって中世文学はこの記録からは除外される。とはいえ、これだけでも五世紀ちかい期間のあらゆる形式の文学をふくむことになるわけで、どんなに大まかな検討法をとったとしても、一人の著者が読者とともにながめるには十分すぎるといえよう。

しかしながら、この五世紀というものは、われわれがなんらかの歴史的・文学的記録をもっている期間の五分の一にも達せず、さらに、われわれの遠い祖先が、記録にも残らない短い世代をつぎと重ねるうちに、徐々に人間精神というものを形成し、彩色し、筋肉組織や神経組織をつたえたのと同じくらい確実に、それをわれわれに伝えた、その長い歴史全体からみれば

ば五十分の一にも達しないことを、われわれは忘れてはならない。この五世紀にわたる年代記に登場する人々は、たんにその五世紀の産物ではない。その背後には何千代におよぶ人間が存在し、彼らはある種の型の行動・感情・思想を獲得し、つぎつぎに伝え、それらはあるいは無意識の中から流れ出て、あるいは文化そのもののさまざまな意識的な変化をとおして、文学に入りこんできているのである。じつにさまざまなことがこの五世紀間に起こったが——さらに現代において加速度を加えた変化は恐るべきものがあるが——しかし忘れてならないことは、われわれが時の流れのなかですすめつつあるこの行列ははるかに長く、えんえんとして先史時代の幽暗のなかまでつづいており、あるいはもっと別のイメージを借りて言えば、たとえラスコーの、あの生命力と神秘的感情とにあふれたすばらしい洞窟画（フランス南部ドルドニエ地方）をきざんだ人々は、今なおわれわれの中に生きていともいえるのである。われわれがもっともよく知っているこの五世紀には、歴史と人工とがいつぱいつまっているために、それが人類の生涯のごく短い一期間をしめしているにすぎないということを、われわれはともすれば忘れがちである。この本を書くにあたって、私は少なくとも、この本全体の背景のいづこかには、遠視的展望ともいべきものをつねに保持しようと心がけたのである。

これは学問的著作というものではない。もしそうであったとすれば、私の名がこの本に付せられることはなかったであろう。というのは、年ごとに減ってゆく私の自負のなかに、学問的自負は全然ないからである。この本について私はいった。「若

い人にはこんな本は書けなかつただろう。これに必要なだけの読書をしていないだろうから。そして、これに必要なだけの読書歴をもっているような年輩の人間ならば、こんな本を書こうなどという無分別はおこさないだろう。」そして私が、たいていの人間ならもうそろそろ悠々自適し、ひなたぼっこでもしていようという齢になって、骨が折れるばかりか、時としてはいらだたくさえる（私は約一万冊の本をもっているが、どの一冊をみつけるのにも捜しまわらなければならないのだ）、こんな大それた仕事を手がけるような無分別をおこしたとしても、それは私が、半世紀ちかくにわたつての散漫ながら広汎な読書と、この種の仕事のためにはないがしろにできないところの、著述、出版、批評、そして劇作、劇団経営などの経験——いわば私を、おおくの批評家やたいていの文学史家がたむろしている食堂から、料理がつくられる台所へとつれだした経験とを、利用したいという誘惑に駆られたからではない。私をほんとうに誘惑したのは、そしてそれゆえに陥落させたのは、われわれの時代はもっとも思いきった決断がなされなければならないぎりぎりの危機の時代であり、このときにあたつて、自らが創りだし、享受してきた文学に表示されたところの「西方」というものについていささかの解明を試みることは、われわれ自身を理解するための助けともなり（そしてこの仕事をしたことは、たしかに私自身には助けになった）、われわれが現在どのような位置に立ち、どのようにしてここに到達したかを自覚する助けともなる、という私の確信であつた。

そういうわけで、厳密にいつてこれは文学史ではないが、い

ざとなれば文学史の用をさせることもできるし、そしてある読者たちには役に立つこともあらうと考えて、付録として二十八ページにおよぶ略伝をつけた。標題からもうかがわれるように、この本で力点がおかれていのは「文学」ではなくて「西方人」の方である。純粹に文学的研究は私はいささかもくわてなかつた。しかし、もし西方人について二十巻の歴史でも出るといふことになれば、そのときは、この本はその文学にあてられた一巻といふことになるかもしれない。事実私は、この本を書いている間ずっと、ここに出てくるすべてのことに關係をもつた、一種の合成西方人とでもいふべきものを漠然と考えていた。どれだけの作家にはたんに名前をあげるだけでなく批評的考察をくわえるかといふ恐るべき問題、それはけつして国民的基盤から決定されるものではなく、この西方人という立場からなされねばならなかつた（その選択をするのは結局は私ではないか、といふ反論が出るとすれば、それにたいする私の回答は、私がいちばんよく知っている西方人は私だ、といふことである）。私はまた、こうした種類の研究がもっとも裨益するのはどういった種類の人々であるかを、つねに心にとめるようにつとめてきた。それは一方では批評家や文学学者ではないし（こうした人々にも何人かは読んでもらいたいとは思ふが）、他方、たんにダイジェストや梗概やびん詰めや袋入りの文化だけをものとめるおびただしい数の大衆でもない（こうした人々にもやはり何人かは読んでもらいたいとは思ふが）。私が主として考えたのは、たいていのすぐれた文学を鑑賞するだけの知性と感受性をそなえながらも、さまざまの当然な理由からして、文学、

とくにこの本でもいちばん大きな部分をさいてきた現代文学に、むしる飽きてしまっているような、多くの国々の、かなりの数にのぼる人々である。今日多くの文学批評は、文学にとくに強い関心をもっているごく少数の人々や、そうした批評を読むことを要求される学徒たちを対象にしている。その結果、今や西方人の運命を左右するような決定をくだすべき、現代の世界社会のより有用有力なメンバーであるところの多数の人々が、首をひねりながら、のけものにされている。とはいえ、私はそれがぜひとも必要だと感じたばあい以外は、批評や批評家について云々することは避けた。共食いはしないものである。

最後に、この仕事を可能にするためにはやむをえなかった制約を、読者諸君にも認めていただきたいと思う。私たちがともに歩んでゆく行手はしばしば不安定であり、ときにはあまりにも速く、ときにはあまりにもゆっくりと、けわしい道をふみ越えてゆかなければならないであらう。道すがらくわえる評言は、ときには貧寒にすぎ、ときには冗長にすぎ、しばしば独断・鈍感・不当なものとなるであらう。にもかかわらず、幸いにして読者の好意と協力とをうるならば、私たちはともどもに、西方人が——非常に古いためにしばしばかえて新しく見える思想や感情に、くりかえし悩まされ、まどわかしかかり、また靈感をうけて、——その文学から生みだしたものについて、いささかなりとも学ぶことができるかもしれない。

第一部 黄金の球体

第一章 活字

活字印刷の発明

もっとも古い印刷本は中国のものである。その一つは、木版印刷であるが、九世紀にさかのぼる。その後わずか二百年にして、中国人は活字を実験していたが、彼らの書きことばにはきわめて多くの文字が必要などころから、この方法は面倒すぎると考えられた。絵画用木版はヨーロッパでも十五世紀の半ばにならぬうちから用いられていたが、各ページをまず一枚の板に彫るか切り抜くかした「版本本」は、はじめて活字で印刷された本と同じころにはじまった。活字発祥の年代についても、場所についても、ドイツ人、オランダ人、フランス人、イタリア人のあいだではげしい論議的になっている。一般の意見としては、ヨハン・グーテンベルグ（略伝四二三）がマインツで印刷したブルガタ聖書（その一冊が十七世紀に枢機卿マザラン（イタリア生まれのフランスの政治家。一六〇二—一六一）の蔵書中に発見さ

れたところから、一般に「マザラン聖書」の名で知られている）に代表されるドイツ説が有力である。そして、たしかなことは、他の国々の最初の印刷者たちもたいていはドイツから渡来したということである。十五世紀の終りまでには、低地諸国（ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ地方）、イタリア、フランス、スペイン、イギリスで書物が印刷されていた。いずれも上質の本で、十六、七世紀につくられた本よりはるかにりっぱだった。

最初のイギリスの印刷者ウィリアム・キャクストン（略伝四〇〇）は、ケルンで印刷術を学び、かねてイギリス商人団の団長として長年在住していた低地諸国で営業した。彼は一四七六年ウエストミンスターに印刷所を設立し、一四九一年に死ぬまでに約百冊の本を出版した。それらの本は、外国で印刷されたもののようにラテン語ではなく、母国語によるものであり、しかもその多くは彼自身が著わしたり翻訳したりしたものであった。彼はまたゴチックでもローマンでもない字体を考案するなど、概してなかなか創意に富んだ努力家で、イギリス文芸に寄与するところ大であった。

しかし、この活字印刷の発明は、書物の筆写が少数の献身的な修道士たちの仕事であった時代に、旱天の慈雨のごとくに到来したものと想像してはならない。そういう時代はもう過ぎていた。すでにずっと以前から、専門の写字生や学生が大量の書物を生産していた。とくにイタリアでは、自身が能書家でもあった富裕な学者たちは、おどろくほど精巧に筆写され装飾された書物をつくらせる習慣があった。事実しばらくのあいだは、これら文学の保護者たちは無趣味なドイツの発明をわらって、

印刷本を所蔵することをいさぎよしとしなかった。しかし、はるばる旅をして、手を痛め眼をうずかせて、やつといともささやかな蔵書をおのれのものとするのできる学生や貧しい学者たちは、印刷本に殺到したのであり、やがては、ギリシア語やヘブライ語の印刷本まで出るようになった。そしてその世紀の終りちかく、ますます多くの本が出版されるにいたって、驚くにはあたらない一つの結果が生じた。法王アレキサンデル六世(在位四九一—五〇三)治下のローマで、検閲がおこなわれたのである。権力は、その直感によって、間もなくおのれの敵を発見したのである。書物はいよいよ登場した。

遠い故郷、中世 學術・文芸が修道士によってその僧房で転写されていたもう一つの時代は、年代において

も精神においても、一般に考えられているよりもずではるかに遠ざかっていた。真の中世、あるいはゴチック時代といえる二、三百年は、すでに永遠に過ぎ去っていた。そしてそれとともに、西方人の生活の真に宗教的といえる基盤も枠組みも、消滅していた。カーライル(略伝四〇六—一八三二)は、自らと読者とを見事に十二世紀にみちびき入れて書いている。

……まだ、われわれの〈宗教〉は、恐ろしい、不安な疑惑ではない。ましてや、それよりもさらに恐ろしい作りものの〈公式〉ではない。それは全生命を包容し、それに浸透する、天に沖する偉大なる〈不可疑性〉である。われわれは不完全な存在ではあるかもしれないが、ここにこうして集まって、連禱を唱え、頭を丸め、貧苦を誓って、すべての心に、不斷に、疑う余地なく、証あかししているのだ——この〈地

上の生〉も、その富も財物も、その幸福も非運も、本質的になんらの実在ではなく、ただ永遠・無限なる実在の影にすぎないことを。この時間の中なる世界は、空氣の像のごとくに、不安を象徴しつつ、壮大・静謐なる〈永遠〉の鏡面に戯れゆらぐにすぎないことを。そして人間の小さな〈生命〉は、偉大なる、そのみが偉大なる、〈天国〉にも昇れば〈地獄〉にも落ちる〈義務〉をもっていることを……

これらすべてを、ゴチックの大伽藍、あの巨大な、作者を超越し、万人の共有物なる、ふかく象徴的な建造物が、いまでも堂々と証言している。それは見方によれば、偏狭な、無知な、残酷な時代だったかもしれないが——そしてわれわれは、僧房か、城か、さもなくば茅屋の住人になる、というようなことができないように、もはやその時代にもどることはできないのだ——西方精神は、その意識の面においても、無意識の面においても、そこに故郷を見出し、しばらくはそこに安住し、その後ついで見られないほどの結合と統一とを達成したのである。この時代が文学らしいものをほとんど生み出さなかったにしても、それはたぶん必要がなかったからであらう。たしかにこの時代は、その後の人間の分裂した精神から生まれたもの、その孤独感や絶望感、その故郷をもたぬ魂、といったものは理解しなかったであらう。これら大伽藍の名もなき下絵師、彫刻師、建築師たちにとってのこの世界は、星群のあいだに迷いこんだ一個の回転する球体というようなものではなかった。それは天国と地獄とのあいだに固定した緑の平面であり、その大部分はキリスト教圏であった。そこでは、戦争は封建領主や王家のあいだのこ

とで、武装国家はまだ出現していなかった。そこでは、人は聖者たるのゆえをもつて權威をあたえられ、共通の言語を話す者たちがおちこちの学問の府を巡歴して歩いてゐた。そこでは、善は善、悪は悪であつて、頭をなやます価値の混乱はなかった。そしてこの時代はやがて、後の世の人々の心の内を、まだ覚めやらぬ夢のごとくに去来することになるのである。といつても、それは政治経済体制として、あるいは社会階級制度としてではなく、精神が調和と結合感とを達成してゐた時期としてである。西方人はこの時代をすっかり忘れさせることはできなかった——そして安易な逃避の瞬間には、この時代の美しいよそおいをもてあそびたい誘惑に抗しえなかった——そのため、彼らの文学の多くはその嚴肅なる詠誦をかすかながらも反響させ、はるか後世までも、いくたの天才がつぎつぎと、神とその宇宙とのこうした統一がいついかにしてふたたび成就できるかを自問して、あるいは希望をさけび、あるいは怒りと絶望とをとどろかせた。なぜならば、人間とは古今永劫に宗教的な存在であつて、つねに何かを崇拜せずにはゐられないのだ。そして、その高樓や尖塔とともに天空高く志すゴチック時代こそは、西方にとって真に宗教的であつた最後の時代だったのである。

「死の舞踏」

活字が普及し、書物や学者が増大していった世界は、すでにこの時代を遠く脱してゐた。

のちに見るように、すでにルネッサンスの燦然たる陽光と残忍な暗影とをみつめてゐたイタリアをのぞいては、十五世紀の西欧はまだ中世のたそがれと廢墟とのなかに生きてゐた。それは奇異な時代であつた。シェイクスピアは、殘虐で騒然として、

死臭が強くたちこめた史劇において、この時代のひびきをとらえている（チャールズ・リード（イギリスの小説家、劇作家。一八一四—一八四四）もその歴史小説『僧院と炉辺』において、それを多分にとらえた）。見栄と暴力と狂気じみた自尊心との持ち主であつたブルジョア（フランス東部の十四）の大公たちが、たぶんその代表的な統治者だつたといえるだろう。「死の舞踏」（十五世紀の絵画・文芸主題）が演じられたのは彼らの宮廷においてであつた。ゴチック時代の眞の生きた象徴性は、街学的な寓喩に衰退し硬化してしまつてゐた。

世界にみちわたつてゐた宗教的な信念と感情とが、ガラスのやうに碎けちつて、狂熱的偏信や迷信や絶望的無神論に分解してしまつてゐた。かつてはたゆまず礼拝したような種類の人々が、いまでは、今日は巡回説教師とともに涙を流し、来週は殺人をくだつてゐた、この時代は、盛儀にも暴力にも、なにか過熱した、芝居がかったものがあつた。だれかのことを借りれば、それは「血とばら」のにおいがした（イギリスでは、ヨーク家とランカスター家とのあいだの多年にわたる血みどろの抗争が、国土を荒廢させ、あやうく破滅の淵にまで追いやつたが、それはのちに「ばら戦争」の名で呼ばれるようになった）。この時代の人間は、眞の中世の宗教的秩序にはまつた人間でもなければ、ルネッサンスの強烈な個性をもつた人間でもなかった。彼は二つの世界のあいだにはさまれて、はっきりした基盤をもたず、おそらくは一路終末の日へと進んでゆく時代に生きてゐた。一方では、新しい、しばしば冷嘲的な現実主義にささえられて、急速に發展してゆく都市の富を獲得・吸収しながら、他方では、狂気じみた矜持と暴力、途方もない迷信と空想、いつ果てると

もない「死の舞踏」に駆られていたのである。

現実と夢の分裂 この時代の文学にも、それと同様の分裂がみられる。観察と現実性にと根ざしたものと、

ロマンスの発生 本質的に空想的・幻想的なものとのあいだの断層が、しだいに拡大してきている。都市が発達し、城が大砲のまえにつぎつぎと陥落するにつれて、戦争自体も騎士的品格をうしななって、世智がらひ職業的なものになり、金と戦略、重火器と火薬の問題になるにつれて、いよいよ多くの人々が、騎士道物語に、無敵の剣や魔法の森や空に浮かぶ城に、魅惑を感じていった。そのため一方では、たとえばフランスの場合のように、騎士道の理想を嘲笑した新しい諷刺物語が生まれ、コミーヌ（フランスの歴史家、一四六四―一九八）を書いた。（一四四五―一五〇九）といった人のきわめて写実的な政治的回顧録が書かれた。そして他方では、貴族階級の粹人淑女はもとより、新興商人階級の主婦や娘たちを対象にして、騎士道の見果てぬ夢を追う、シャルルマーニュ大王と十二勇士、アーサー王と円卓の騎士たちのような、念の入ったロマンスがつくり出された。これらのロマンスの土台になった物語、とくに古代ケルト系のもは、しばしば人生についての深遠な解釈をふくんだ、象徴性ゆたかなものであり、根本的に神話と伝説とにつながるものであった（それらの中では、『ギヤウエインと緑の騎士』（十四世紀の詩。アーサー王の伝説）はすぐれた標本である。そして事実、マロリー（一三九七―一四七五）の筆になるアーサー王物語——それは一四六九年に完成されたが、一四八五年まで出版されなかった——においても、往昔の象徴性と神話的要素とがすっかり消失してしまっているわけではない）。しかし、かつては人間存在

のより深い層への想像力による浸透であったものが、いまでは、ロマンスのよそおいのもとに、人間存在の根源をはなれて地上はるかにただよい、空想と寓喩との空漠たる王国にさまよいこんでしまったのである。こうして、そこにはすでに、われわれが今日知りすぎるくらい知っているところの分解が生じたのであり、つまりそれは偉大な芸術のみが閉ざしうる亀裂であり、皮肉に最悪のものを平然とみとめる冷嘲的「現実主義」と、現実とのあらゆる接触を故意に断つ「ロマンス」、つまり実際の夢のもつ心理的責任をさえ拒否しようとする夢の生活、とのあいだの分裂があったのである。そのような分裂、一種の分裂症にかかった芸術は、二つの世界のあいだに低迷する過渡期の特徴をなすものといえる。十五世紀はそのことを知っていた。そして今日、小説や映画やテレビの氾濫をまえにして、われわれはふたたびそれを知ることになった。

古典学者と新しい商人たち しかし、時代は急速に変わりつつあった。活字は膨脹する都市から都市へとつぎつぎと進

出して、かさばった木製印刷機は休むひまもなかった。いまやささまざまな種類の本が印刷され、配布されていた。トルコの侵入によって故国をのがれたギリシアの学者たちは、もうずっと以前からイタリアの学院で教えていた。しかし、イタリアにはすでに到来していた新時代ルネッサンスにたいする古典学の貢献を過大視してはならない。結局、ローマ帝国の遺跡がいたるところに見られるイタリアは、じつは一度も古典の影響の外にあったことはなかったのだ。そして地中海の北でも西でも、新しいことがたくさん起こっていたし、その多くは、少なくとも

古典学の復活と同じくらい重要な意味をもっていたのである。たえまない戦争のための費用が必要だったし、その金の大部分は都市の商人や住民のあいだから調達しなければならなかったが、彼らを、封建制の規格にはめこむことも、さりとて無視することも、できなかった(エドワード四世^(一四四二—一四八三)がロンドン商人の機嫌をとって騎士の位をあたえたりしたのも、かならずしも彼らの美しい女房たちのためだけではなかったのである)。急速に独自の思想を発展させていったこの新興階級が、いまや芸術と文学との保護者になった。波止場・倉庫・帳場・海外駐在の代理人からの情報などからなるその世界の中で、中世のなごりは、大建築をのぞいては、崩壊し解消しはじめた。新時代の招来には、学者と同じくらい商人も力をかけたのである。

ひろがりゆく世 たぶん船乗りたちの力はそれ以上のものがあ

界、新しい約束 ったであらう。多年ポルトガル人はアフリカ沿岸を航海していたが、奴隷と黄金と象牙とをもとめてしだいに船脚をのびし、ついに一四八六年には、バルトロミオ・ディアス^(一四五〇—一五〇〇)が、強風のために航路からとおくはずれて、喜望峰をまわった。いまはポルトガルの植民地となったアゾレス群島のかなたには、「アンティラ」、「ブラジル」^(大西洋にあるとされた伝説的島の名になった)をはじめとしてさまざまな島があり、それらの島は西廻りでインド諸国へゆく場合の中継地として役立つ(というの、伝説によればそれらはすばらしい肥沃だとされているから)と信じられていた。さらにまた、かつて北欧人がはるか西方に「ヴァインランド」^(グリーンランド植民者レイフ・エリクセンが紀元一〇〇〇年ごろ到達したとつたえられる北米の海岸。どこかは不明)とよぶ土地を発見したという伝説がつつたわっており、し

かもそれは、ほとんどの中世以来の地理的伝説とはちがって、はからずも事実であった。何年ものあいだ、あちこちの国の船乗りが、アゾレスのかなたにこれら伝説の島々をさがしつづけ、それが見つからないと、通りすぎてしまったものと信じて反転した。しかし、スペイン国に仕えて航海していたジェノアの船舶長は、ゆたかな経験とかたい決意とをもった男であったが、伝説の島々を発見するというような考えはしりぞけて、まっすぐ大西洋をよこぎる進路をとり、ついにみずから「西インド諸島」とよんだ島にたどりついた。かくて一四九二年、クリストファー・コロンブスは広大無辺な新大陸への道をひらき、地球を拡大した。それから数年以内に、カボット^(イタリアの航海者。一四二五—一四八二)はラブラドル半島をみるとめ、コロンブスは西インド諸島をこえてアメリカ本土を発見し、ヴェスプッチ^(イタリアの航海者。一四五二—一五二二)とピンソン^(スペインの航海者。一四六〇—一五二四)はブラジルの岸を航行した。それから程遠からぬ一五〇七年、ロレーヌの地理学教授^(ヴァルトゼーミ)はヴェスプッチの旅行記を出版してのち、新大陸にヴェスプッチの洗礼名——アメリカ——を冠することを提案した。十六世紀がおわるまでには、活字と印刷機とはメキシコ・シティー、ゴア、リマ、マニラ、マカオに進出しており、大いなる地球のいたるところで印刷工が仕事にはげんでいた。

政治的・経済的に大きな意味をもったこの新大陸の発見は、作家たちにも直接の影響をあたえた。それは彼らに、地球はいままで想像されていたよりもはるかに大きく、またはるかにゆたかな未来を約束するものであることをしめした。そこには、あらゆるヨーロッパ的伝統の外に立って、歴大な大陸がそっく